

1. 1948

中国回教社会の構造(社会構成史大系、第一部、1949、第二部、1950)

- (24) 甘肅回民の二類型(民族学研究所紀要、1、1944)
- (25) 佐口 透、中国ムスリムの宗教的生活秩序(民族学研究、8の4、1953)
- (26) 中国イスラムの經典(東洋学報、32の4、1950)
- (27) 伊東忠太、広東に於ける回教建築(建築雑誌、363~370、1917、東洋建築の研究、

所収)

- (28) 村田治郎、回教の寺々(東亜学、1、1939)
- 花頭曲線の文化(学海、1の1、1944)
- 中国回教寺院の二つの型(日本建築学会研究報告、12、1951)
- (29) 田坂興道、西洋暦法の東漸と回回暦法の運命(東洋学報、31の2、1944)
- (30) Yabuuchi Ko, Indian and Arabian Astronomy in China  
(Silver Jubilee volume of the Jimbun Kagaku Keukyū-  
jo, 1954)
- (31) 角野達堂、清真大学考(回教園、5の4、5、1942)
- 回儒劉智の「天方典禮要解」(支那仏教史学、4の1、1941)

## Mawālī に 就 いて

中 村 満 次 郎

I

最近筆者は、前期アッバース朝社会に於けるMawālī (単数Mawla) に就いて付言した二つの論文を書見する機会を得た。一つは、東北大学文学部年報第七号所載 佐藤圭四郎著、アッバース朝社会の一考察であり、今一つは、アハマド・アミーン著「イスラムの朝」第一章第二節 Arab と Mawālī との抗争である。Mawālī に就いては、殊に Arab との関係に於いて、アッバース朝社会の特質を遺憾なく表示しているため、佐藤氏は、Mawālī に就いてはとも角、同論文を未だ完結しておられない時に、その論文に就いて書くことは素より憂慮されるが、ここに一筆して同氏の叱責を賜われれば幸甚の至である。

アハマド・アミーン氏は1887年エジプトのカイロで生れたイスラム学者であつて、その著書「イスラムの朝」は「イスラムの黎明」の続編として1933年カイロで出版された、前期アッバース朝時代の社会、思想、文化、宗教の各方面に亘る研究書である。時代的には佐藤氏が対象とされた「アッバース朝の最盛期、就中アル・マフディーよりアッ・ラシードに至る時代」に相応

するわけであるが、しかし「この時代のイスラーム社会の下部構造、就中、土地問題と商業資本の問題をとり上げ、可能な範囲内で当時のカリフ政権を中心とする政治権力との関連にも触れてみたいと思う」と、その結言に於いて述べておられる通り、佐藤氏の中心問題は、土地問題と商業資本であり、Mawāliに就いては付言に過ぎないのであるが、ここにアハマド・アミン氏のMawāliに就いての所見を披瀝して、筆者のMawāliに就いての疑問を提示せんとするのである。

## II

『お前たちは劫火の穴の縁にいたのを、アツラーがそこから救い出して下さつた。』コーランのこの一節に対し、系図学者として有名なQatadahは「(アツラーに助けられた)このアラビアの種族は、人間が野卑で貧しく、渾沌としていて、ただ沙漠を彷徨し、飢に苦しみながら生活を営んでいた。そしてペルシヤとギリシヤの二匹の獅子に挟まれて身動きもできず、さりとて自分の国土には当時羨望するものはなく、惨めな生活に甘んじ、死ねば火中に投げ捨てられ、征服されることはあつても征服することはない、当時より以前のことは知る由なく、土地を耕作している者だけが少し恵まれた生活をしているにすぎなかつた。そして一度アツラーがイスラムと共に現われて貴方がたを啓典の後継者となし、聖戦に導き、恵みを授けたもうたのである」と解いている。

Tabarīは、その年代記に、<sup>c</sup>Umarがペルシヤの征服に際し、ペルシヤからその軍隊の数を減したため、人々はそのことに驚き、如何にしてペルシヤと戦争をするかを尋ねたのであつたが、「諸国のイスラム教徒の権威と圧力により、彼等をイスラム教徒に従わせることにある」と<sup>c</sup>Umarは表明した、と記している。

Kitāb-i-<sup>c</sup>Aghānīの伝えるところによれば、Mawāliの一人の男性がSalīm族のアラビアの女性に求婚して、その結婚が許されたのであつたが、Muhammad ibn Baṣṭr al KhārājīがMedinahに乗り込んで、当時のMedinahの長官であるIbrāhīm ibn Hishām ibn Ismā'īlにそのことを訴えたため、別れさせられ、その上二百回も鞭で打たれる罰にあい、頭髮と口髭と眉を剃り落されてしまつたのである。他面Medinahの長官は「Sunnaに従つて正統に裁かれた」と言つて称賛されたのである。

アツバース朝となるに及んで、アラビア人の誰れかが、Mawāliである女性と結婚したいと思えば、父、祖父の許しを得て結婚できるようになつたのである。しかし、その子供はMuwalladと呼ばれて卑しいものとされたのである。

沙漠のアラビア人が裁判官Sawwarのところへ来て、「私の父親は死にました。あとに私

と弟とが残りました。」と訴えたのであるが、「領分は二分せよ！」とその裁判官は命じた。そこで彼は、「突は私には一人のHajīnがいます。」と付け加えたのである。裁判官は、「では、もう一つ領分を設けなさい。」と裁定した。そのアラビア人は、「財産は如何にすればよろしいか？」と尋ねた。「若し他に相続人がいなければ、三分しなさい。」と裁判官は言い渡したのであつた。そこでアラビア人は、「裁判官は、私と弟とそして我々のHajīnとであることを御理解だとは思えない。」と言つて、正したのであるが、裁判官は、「財産は三等分しなさい」と判決したのである。その沙漠のアラビア人は、「Hajīnも私や弟が取ると同じだけ取るのですか？」と言つた。裁判官は、「その通りだ！」と答えた。そこでそのアラビア人は怒つて、「沙漠には国家はない。自由があるだけだ！」と言い放つたのである。

アハマド・アミン氏はこれら一連の資料をもとに、「事実オンマヤ朝にあつてはイスラムの権威が平等に行渡つていたのではなく、為政者によつてその態度が相違したりした。Mawālīはアラビア人の支配下にあつた方が、ペルシャやギリシヤの支配下にあつた時より幸福であつたかどうか、これは政治的な問題である。しかし、ただ言い得ることは、上部階級、武中、宮中、官庁や宗教の部門については、MawālīでもArabでも同等に富み榮えていたのである。」と述べている。

Mawālīはオンマヤ朝を嫌い、その衰退を早めた程であるが、アラブからペルシャへその統治権を移そうとする意図はなかつた。ただハンミテ王家を援助することによりオンマヤ王朝からその統治権を奪い、カリフという名譽ある地位を尊重すると同時に、自分達の國家の自體を得ていつたのである。

しかし、オンマヤ朝が滅亡し、アツバース朝となつても、アラビアの種族と種族との抗争はその跡を絶たず、アラビアが國家として統一達成することを妨げた。Miḥān ibn Zāid aḥaṣ Ṣībānīなど、Yemenを統治した時、Rabi'ahとその種族以外のNisār族と同盟したため、同族の一味のため殺害されてしまつたのである。

他面、ペルシャはある程度自分の欲望を満足させていつたのであるが、どこまでもペルシャ王朝を樹立させることが彼等の望むところであつて、ペルシャが確保した領域は多いとは言えなかつた。だが前期アツバース朝のカリフはペルシャに満足し、al Mansurなどは自分の死に臨んで、「私はお前にホラサーンの住民を推薦する。彼等はお前の援助者であり、又一派でもあるからだ。」と自分の息子に遺言した程なのである。

ペルシャの優位は遂に歴史家をしてペルシャの政治、行政力の勝利とし、前期アツバース朝時代の重要な特質の一つと考えさせるにいたつたのである。しかし、どの程度までアラブが征

服されたのか。ArabとMawālīとの関係はこれで終りをつげたのか。事実これがすべてではなかつた。アツバース朝のカリフはハシミチ王家によるアラブ系であつて、彼等は繁栄し、数々の業績をなし遂げていたのである。アラブが遂にペルシヤの支配下に陥つた時、アラブとペルシヤとの結びつきは、すなわち、al MansūrとAbu Muslimとの関係であり、ar-RashīdとBarmecideとの関係であつた。

しかし、アツバース朝への変遷はペルシヤ勢力の伸張を意味するが、他面、アラブ勢力の軽減でもなかつた。この時代に於いても、人々はアラブとの血縁関係によつてその繁栄を望み、Abu Muslimでさえアラブの出身であることを主張した程なのである。

Kitāb l-Aghānīによれば、Walīban ibn al-Hubāb が自分はアラブの出身であることを主張して止まなかつた。そこで、Abu l Atahiyahは次の様な詩句カシダをよんで彼を諷刺したのである。

Walībよ、貴方は瑞々しい、熟したなつめやしの実<sup>1</sup>に混じつた、悪質<sup>2</sup>なつめやしの実のやうに、アラブのなかにいるのか、

Mawālīにもどつて、そして広大な土地を駈けめぐれ。アラーに誓つて、我々と共にいなさい、貴方より我々の方がどれだけArabに近いことか！云々。

### III

しかし、疑いもなくペルシヤの勢力はアツバース朝になつて日に日に増大し、オンマヤ朝においては、Mawālīを官僚として従事させることは怒りを買うも<sup>3</sup>とで、稀であつたが、al Mansūrにいたつて、彼は最初にMawālīを官僚として従事させArabにも増して彼等を好んだのであつた。この傾向は彼の以後増大し、遂にArab出身の長官が減少するまでにいたつたのである。この点、佐藤氏の「解放奴隸」(Mawālīのこと、筆者注)は「指揮官」と共に、カリフの「一族」や「親近者」と同じようにカリフの身近にあり、その信頼を受けていたことが知られる。そして解放奴隸はカリフの代理として凡ゆる方面に派遣せられている。軍監として「指揮官」と共に従軍しているのはその一例である。また解放奴隸は要職たる「官宰」に任命せられている。解放奴隸にして「大臣」や「會計監査院」の長官などの重要な職掌に任命せられたものである。解放奴隸が各州の長官として知事に任命せられている事例がある。「馭通長官」はその一つである。——等に相応するのであろう。しかし、アツバース朝といえども、佐藤氏の言われるような「官僚層を構成する有力な社会階層の一つである」という定義はどうであろうか。佐藤氏がいみじくも「カリフ政権を支えている上部構造は、膨大な官僚層と夥しい軍隊である。この上部構造を支えている下部構造は、ペルシヤ人を始めとする被征服民

を主とし、これに征服者たるアラビア人の加わつた農民、手工業者、商人なのである」と述べておられる、その「ペルシヤ人を始めとする被征服民」こそが、Mawāliīではないのであろうか。

さて、アハマド・アミーン氏は、Tabarīがその年代記の中で、「al-Mansurに肌色の黄色い一人の召使がいた。彼は経験もあり、欠点などない人物であつたが、ある日、al-Mansurは彼に尋ねた、貴方の人種は？彼は、私はアラブでございます、と答えた。そこでアラブのどの種族に属するのですかと、al-Mansurは尋ねた。Khawlān 族です。Yemenの捕虜となりました。我々の敵は私を捕えて、宦官とし、奴隸としてしまつたのでございます。そして私はオンマヤ王家のさる家に身を寄せていたのですが、今、教王さまの御厄介になつていましてでございます。彼はこの様に答えたのであつたが、al-Mansurは、まあ！何んと貴方は恵まれた人か！しかし、私の宮殿にアラビア人は入ることができないし、また私の妻に仕えることもできない。出て行きなさい。アツラーの神よ、彼が健康であらんことを。そして貴方の望むところへ行きなさい！と言つた。」という史実を記しているのを、引用しているのであるが、この史実は私にその微妙な歴史の空気を感じさせるのである。

al-Ma'munの治世となるに及んで、ペルシヤの勢力は増大するばかりであつたが、ここでペルシヤはオンマヤ朝からアツバース朝となつたときに得たと同様の第二の勝利を獲ち得ていたのである。何故ならペルシヤの大多数のものがal-Ma'munを支持し、アラビア人の多くのものがal-Amīnを支持したのであり、al-Ma'munの勝利は、ひいては、ペルシヤの勝利となつたからなのである。しかし、その後、al-Mu'tasimがカリフとなるに至つて、ペルシヤの地位をトルコが取つて代り、アラビア、ペルシヤを斥けて、アツバース朝も中期となるのである。

ArabとMawāliīとの抗争は文学の面にも学問の面にも繰広げられたのであつたが、「ArabはMawāliīに屈したのではない、抵抗したのである。ときには烈しく、ときには静かに闘争は繰返されたのである。」とアハマド・アミーン氏は述べ、次の如く結論している。「この両者の抗争はArabの敗戦とMawāliīの勝利に終つた。しかしArabが完全に負けたのは、政治、行政の面であつて、宗教、言語について言えば、Arabが支配したのである。ゾラスターはイスラムと共存はできなかつたし、Mawāliīの諸言語はアラビア語を弱体化させるどころか、アラビア語に奉仕し、アラビア語を種々な面から変革していつたのである。政治に理想をかけ、その目的を達成していつたMawāliīは、宗教にも言語にも貢献していたのであり、両者の基礎づけをすると同時にその粗雑さを正していつたのである。—— 無神論の動

向を、彼等は時に応じてみせたのであるが、その動向は強固に休止していた。たとえ動いたとしても微々たるものであつた。それはちようど彼等のある者がアラビア語の位置にペルシヤ語を取つて代らせようとする行為の如きものであつた。当時、アラビア語は正規の言語であり、宗教の言葉であり、学問の言葉であつた。Ma w ā l ī はアラビア語を学び、そしてそれは自國語の如くに洗練されたものであつた。」と、

私は、この文章をもつて、この資料紹介を終らうと思ふ。（9月16日）

## ペルシヤ美術展から

吉 田 光 邦

真夏のテヘランの博物館はいつもひつそりとして、黄色のカーテンが印象的であつた。明るく輝くばかりの光がいつはいに室にあふれているなかで、私は幾日も先史時代にはじまる豊富な蒐集を見歩いていた。金ボタンの制服の守衛達も、外観はいかめしいけれども、たえず異邦の者にも笑いかけ、写真をとつたりノートをとつたりしていても、うるさく干渉することもなかつたし、折々には見物に来ている人たちが私につきまとうのを、たしなめてくれたりもした。日本では全く見られない大きな窓から、豊富に明るく流れいる自然光が、すべての陳列品を微細な点まで光らせていたのである。そして時には許されて完備した図書室で、いろいろの書をくりひろげてみたりもしたのであつた。

そうした明るいペルシヤの太陽のもとでみた忘れ得ぬ美しさを示す品々に、この度再びめぐりあつた時、その印象の余りに異なるのに、私は驚かなければならなかつた。ああした一例から光を当てたりスポットで浮び上げたりする展観は、断じて中近東の乾燥地帯に生れた美を観る態度ではあるまい。陽光の下で生れたものは陽光に帰してやれ。湿つぽい間接光の中では、あの透明な青緑色や黄色もその輝きを失つているのである。金の輝き、銀の輝き、それらはすべてあの降りそそぐまばゆい陽光のもとで、はじめてその豪華な美しさを示すのだ。グルガン出土の大きな水差（目録281）は、たしかテヘランでは二階の中央、東西の窓から明るい光の入る中で、四方ガラスのケースの中央に堂々と置かれていた。そしてラスターの強い光沢が強烈な印象を与えるものであつた。だがここではせまい櫛の隅に押しこめられ、ぼんやりした光がわずかに文様を浮はせているにすぎず、わびしいばかりであつた。

こうした陳列は日本のデザイナーのさかしらであろうか。ルーブル展で示された展観形式の無反省な模倣であろうか。しかしあれは柱頭は柱頭に、家具は家具の位置に、すべてが本来あ